

歴史的に見たときの「三代目」の役割

大学 ICT 推進協議会 前会長 / 人間環境大学 環境科学部 教授 **深澤 良彰**



大学 ICT 推進協議会 (AXIES) は、大学等高等教育・学術研究機関の教育・研究・経営に対して ICT を活用して飛躍的に強化することを目的として、2010 年 12 月に設立総会が開催され、翌 2011 年 12 月に、第 1 回の年次大会が福岡で開催された。設立当時の正会員数は 14 大学であったが、その後、正会員数、賛助会員数ともに順調に増加し、2023 年 12 月時点で正会員 172 機関、賛助会員 94 社となった。この間を平均すると、毎年 10 大学ほどを正会員として、7 企業ほどを賛助会員としてお迎えしている。初代の会長は九州大学の安浦寛人先生であり、2 代目の会長は京都大学の北野正雄先生、これを引き継いで、私が 3 代目の会長をお引き受けしたのは、2019 年 6 月のことであった。

ここで、歴史的に、3 代目を見てよう。源 実朝、足利義満、徳川家光、この 3 人が、鎌倉幕府、室町幕府、江戸幕府各々の 3 代目である。

鎌倉幕府では、執権を務める北条氏などが主に政治を担当した。これに対して、源 実朝は、成長するにつれ政治等への関与を深めようとした。その過程で、政権を確実なものとするために御家人による多くの騒乱を治めた。しかし、実朝が有名なのは、これらについてではなく、松尾芭蕉や正岡子規など多数の歌人から最大級の賛辞が送られている家集『金槐和歌集』に多くの和歌が収められ、これ以外にもいろいろな勅撰和歌集に百首近くが入集され、今に残されていることである。

この視点から、3 代目会長としてやらなければいけないことは、AXIES の活動の記録をきちんと残さなければいけないことである。もちろん、理事会の議事録等はこれまでも残されてきているものの、正会員大学や賛助会員企業の活動は広く収集・広報・共有化されてきたとは言い難い。

このために必要と考えられるものは、Web ページの充実、論文誌および機関紙 (会誌) の発刊等であった。

Web ページは、AXIES 設立以来のものが陳腐化してきていたため、北野前会長時代から更新作業に着手していた。私の不徳の致すところで、いくつかの問題が起きてしまったこともあったが、無事更新を達成し、実用に供している。しかし、Web ページはこれで完成ということではなく、今後も継続した更新をしなければならない。

論文誌については、幸いなことに、従来、国立大学法人情報系センター協議会・学術情報処理研究編集委員会が編集・発行してきた学術情報処理研究 (Journal for Academic Computing and Networking, JACN) を引き継ぐことで実現することができた。内容としては、継続して、高等教育・学術研究機関に関連した ICT 技術開発、情報基盤システム構築、認証基盤・情報ネットワーク設計および運用、情報セキュリティマネジメント実践、ICT を活用した教育実践等の研究結果などのテーマを扱っている。もちろん、論文「誌」と言ってもすでに紙媒体での出版ではなく、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 4.0 CC-BY を採用したオープンアクセス誌として、J-STAGE 上で公開されている。この発刊にあたっては、上田哲史先生 (徳島大学) を中心とする広報委員会のみなさんに大変お世話になった。深く感謝したい。

これに遅れて、機関誌も今回発刊することになった。この拙稿が掲載されているものが、機関紙第 1 弾である。

足利第 3 代将軍義満は、南北朝の合一を果たし、有力守護大名の勢力を押さえて室町時代の政治を確立させ、文化面では鹿苑寺舍利殿 (いわゆる金閣) を建立するなどして北山文化を開花させ、足利幕府の最盛期を築いた。しかし、これらのできたことは、元との勘合貿易を盛んにし、経済活動を活発にしたことが大きい。

AXIES がさまざまな活動を活発に行っていくときには、それを可能にする財源が必要となる。AXIES の財源のほとんどは、正会員、賛助会員からの会費である。つまり、基本的には、正会員数、賛助会員数を増

やすことによって、より安定した財源を得ることができる。この意味で、前述のようにみなさんのご尽力で会員数が増えてきていることが大きな支えとなっている。一方、今後に向けては、比較的安価に抑えてきている会費をどのようにするか、大学の規模による傾斜型の会費を実現することによって、小規模大学の加盟を促進できるか、出入りが激しい賛助会員に入会金（仮称）を設定すべきか等残してしまった内容は多い。

徳川家光の時代には、戦国時代のような戦いはなかったものの、藩内の内訌などを理由に、多くの大名に改易を命じている。一方、幕政における改革としては、老中・若年寄・奉行・大目付の制を定め、二百余年続くこととなる幕藩体制を確立した。特に、大名に参勤交代を義務づける規定を含むように武家諸法度を改訂したことは後世に大きな影響を与えた。

AXIES 初代会長の安浦先生の時代には、安浦先生の所属先である九州大学に、2代目の北野会長の時代には京都大学に事務局が置かれ、事務局の運営に大きな貢献をしていただいていた。しかし、このやり方では、事務局を背負ってくれるような大学の方でないと会長をお願いできないし、事務局が替わることによって、事務内容の継続に難点が生じることとなる。

そこで、会長によらず事務局を固定した場所に設置し、事務局スタッフも、独立して事務局業務を行えるように整備を進めてきた。現時点では、事務局長（代行）1名、事務局スタッフ4名の体制を構築した。事務局スタッフとしては、まだ経験が少なく、かつ、どこまでを事務局で担当すべきなのかについて曖昧な点も多い。従って、この規模が適正かどうかは、今後1～2年様子を見てからの判断となろう。しかし、これが可能であったのは、これを実現できるだけの財政基盤が確立されていたことが大きい。

各種の文書を制定することも重要である。私が会長として着任した時には、事務スタッフの就業規則すらなかった。このため、事務スタッフの給与をどのようにして決めてきたのかも明確ではなかった。そこで、2022年3月開催の理事会において就業規則を制定し、運用してきた。しかし、厚生労働省の提唱する「働き方改革」に沿って働きやすい労働条件を実現するためには、より良い就業規則が必要であり、事務局職員へのヒアリング、関係機関からの情報収集を行ない、現在、その変更を理事会に提案し、議論を進めてきている。

就業規則以外にも、事務局の定常的な運営を進めていくためには、各種の規程等の整備が必要不可欠である。しかし、急いで各種の規程等を整備する余力は現時点ではないので、とりあえずは、実際に行ってきたさまざまな判断に対して、それを蓄積し、Q&A的にまとめていくことを進めている。

私自身は2023年5月の総会で会長任期を満了し、4代目会長の青木孝文先生（東北大学）に無事バトンタッチをすることができた。後顧の憂いなく、青木会長にバトンタッチできたことは、幸せであったと思っている。にこやかに握手をして交代というありがちな写真はないものの、2023年度の年次大会の際に撮影した記念写真を見ていただきたい。

さらに、私は、2024年5月の総会で、元会長としてのフォローアップの理事も退任する予定になっている。微力ではあるものの、できれば、今後も、なんらかの形で AXIES および青木会長をお支えできればと考えている。



【著者略歴】

深澤 良彰

1983年3月早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了。工学博士。1987年早稲田大学理工学部電気工学科助教授。1992年同理工学部情報学科教授。2024年人間環境大学環境科学部教授。早稲田大学教務部長、研究推進部長、理事、図書館長、大学ICT推進協議会会長等を歴任。実務能力認定機構理事長、日本オープンオンライン教育推進協議会副理事長などを兼務。専門はソフトウェア工学。